

平成 28 年度 第 2 回 東遊園地再整備検討委員会 議事要旨

日時:平成 28 年 11 月 11 日(金)10:00~12:00

場所:神戸市役所 1 号館 14 階 AV1 会議室

議 事

■社会実験の報告（一般社団法人 リバブルシティ・イニシアティブ より）

- ・ 都心の中心にある東遊園地を活用することにより、市民のアウトドアリビング、都心の価値向上、コンパクトシティの核として機能すると考えている。旧居留地は、西側は賑やかだが、東側は賑わっているとは言えない現状を、東遊園地が変えて行けるとも考えている。
- ・ 2015 年、2016 年の社会実験を通じて、市民、行政、運営している者が同じ夢を見ることができたのが、一番大きな成果だと感じている。
- ・ 一連の公募プログラムを通じて、最も力を注いだのは「公園を育てることに、どれだけ多くの市民が参加できるか」ということである。公共空間を市民が自らつくるということに価値があり、傍観者から、消費者へ、市民へという考え方である。
- ・ 公園はまち全体のレバレッジポイントとしての役割もあるとも感じており、大きな価値を都心に生み出すことができるのが公園ではないかと感じている。
- ・ 公園を育てる中で、市民としての文化が育つ。一人でも多くの方が参画側にまわることが重要である。

■社会実験の報告についての委員コメント

- ・ 当初は、芝生化に対する心配や懸念を抱いていたが、社会実験を通して、都心の緑が人々に与えた影響が大きい事は明らかである。これからも、市民全員で取り組める市民参画を継続できると良い。取り組みを改善していく中で、市民の声をどれだけ反映できるかが今後の課題である。
- ・ 東遊園地の歴史は、旧居留地時代は「レクリエーション型」、次に「ガーデン型」、現在は「イベント型」となっている。社会実験の結果より、今後は「プログラム型」が求められていることが明白である。都市公園から都市広場へ転換する時期となり、非日常的なイベント型の公園ではなく、日常的なプログラム型の広場が求められているということがポイントである。プロセス、プレイス、マネジメントをシェアする考え方が重要であり、従来の行政主導型の都市公園から市民参画型の都市広場への転換が都市の価値向上につながる。

- ・ 社会実験の成果について、新聞記事等では芝生だけが取り上げられているが、運営体制や市民公募のプログラムが 99 実施されたという事が重要である。市民の力が公園を育てる原動力となっているのが大きなポイントである。社会実験の効果を、どのように東遊園地の再整備計画につなげていけるかという観点から、今後議論をしたい。
- ・ 社会実験により、公園のビジョンを先に見せるという事が非常に重要だという事を再認識した。2016 年アーバンピクニックのポスターには、公園のターゲット像が明確に表現されており、デザイン都市神戸の中心にある公園であることがひと目でわかる。今後は、発信方法、人を巻き込むときの細かな仮説、ハードだけでなくソフトを含むデザインをチームでつくることが重要と考える。
- ・ 社会実験を通して、東遊園地の平日昼間の親子等の公園利用が増えていることを実感した。社会実験の期間中は、カフェの運営が、誰もが安心して公園を利用できる環境づくりに役立っていたと認識している。ガイドツアーも実施されていたが、今後市内の小中学生を対象とした「公園の歴史を伝えるプログラム」への発展等可能性のあるプログラムだと感じており、今後も継続を期待したい。
- ・ 社会実験は、300 人を超える人々を巻き込む成果をあげ、神戸の底力を感じた。この神戸のまちの力を、まちづくり、公園づくりに活かすことが、神戸の素晴らしい可能性につながるということが見えてきた。今後は、制度や仕組み、運営主体や管理のあり方、持続可能な経営、プランニング、ターゲットの想定、ユーザーを巻き込む方法等を、社会実験の成果を活かしながら、再整備につなげなければならない。

■東遊園地の将来象とターゲットイメージについての委員コメント

- ・ 東遊園地の目標は、神戸市の他の事業（例えばパークレットや三宮プラッツ等）との関係性も重視すべきである。他の部局やプロジェクトとの連動性を強化することも重要である。東遊園地を都市の核とすれば、核を中心として都市が輝くための戦略となる。また、導入される機能は、具体的な空間像を伴った中に位置づけがされなければならない。
- ・ これまでの公園は、形態・ビジュアル的な面を重視していたが、今後は、より使いこなせる場所をどうつくっていくかを、ニーズとして受け止めなければならない。東遊園地は、市役所 2 号館、KIITO、ウォーターフロントまでどうつないでいけるかという広域的視点から、前後の動きをとらえインセンティブをとる場所であり、東遊園地には、(都心の)ビジョンを出して牽引する役割もある。
- ・ 今回の社会実験をビジネスモデル化して仕組みを議論していくことが、今後は重要である。ターゲットとしては、市民が最も重要であり、次にインバウンドである。神戸市民のライフ

スタイルを東遊園地でどうつくっていけるかが重要な視点である。

- ・ コンセプトを実現するために、制度・仕組み、運営、収支、都心のつながり、公園のデザイン、利用者について検討しなければならないが、さらに重要なのは時間軸や季節軸の発想である。次のステップへのつながりの部分を工夫してほしい。コンセプトを実現するためには、バックヤードも重要であり、電源や搬入等を含めた運営側の使いやすさに配慮した視点も重要である。
- ・ 社会実験を通じて、公園の利用者層については、子育て中の家族が最も多く、次に旧居留地や都心を訪れる人が多いことを実感した。これまでは、三宮には、有料の場所以外にゆっくりと過ごせる場所がなかったということだと認識している。また、働いている人の利用は少なかったので、今後の課題ととらえている。人の流れに関しては、三宮では、朝と夕方に、一方向にのみ人が流れ、東西方向の流れは少ない。今後は、目的性をもって人が集まるようなプログラムの実施により、人が公園に来るきっかけをつくる必要があると感じている。
- ・ 公園は都市の余白的な場所として重要であり、東遊園地も、使い方を限定された場所は少なくても良いという印象をもった。利用者のニーズはソフトで対応できると実感した。
- ・ 社会実験の公募プログラムは、「一般的な利用者にとって公園の魅力が増すかどうか」という視点を持ち、応募者とコミュニケーションを図りながら進めた。

■ゾーン別の再整備の検討についての委員コメント

- ・ 各ゾーンが整備された時点でのコンセプトやタイムラインも評価軸として必要である。
- ・ 多目的広場周辺を一つのエリアとしてとらえると、より魅力的な設えとして活かすことができる。その中で、パフォーマンス広場と多目的広場の連動や位置づけについても検討が必要である。多目的広場は、夏季は暑いため、利用者が減少する。したがって多目的広場南側での日除け空間をつくることは効果的と考える。
- ・ ファーマーズマーケットが開催されているエリアと多目的広場のエリアが、現況では分断されているが、多目的広場周辺をコアとして検討を進めるのは効果的である。
- ・ 噴水広場と税関の間の阪神高速道路高架下をパブリックスペース化し、みなとのもり公園の入口とも結ぶ歩行者空間とすると、海へつなげることができると思う。従って、噴水広場の検討は、海とのつながりや計画と共に進めるべきである。
- ・ 旧居留地側とのレベル差の問題については、色々な改善策があると思う。
- ・ 東遊園地の社会実験でこれだけの挑戦的な試みが行われているので、再整備計画の進め方に関して、人々の関心が高まっている。計画設計者選定や設計の手法や進め方に関して、設計プロポーザルの開催や市民意見を反映した新しい設計手法を検討するなど、再整備に向けたプロセスをどうデザインするかが今後重要である。

- ・ 東遊園地のリノベーションには、今あるものを「取り除く」「行きやすくする」という観点が、都市広場型に転換するために必要である。モザイク状になる以前のベーシックな姿を取り戻すことが重要であり、即ち南北のリニアな空間に多目的広場やパフォーマンス広場が接続しているというベーシックなゾーニングを取り戻すことが重要である。
 - ・ プログラム型の広場を考える今回のリノベーションでは、設備系のリサーチ、設備系のゾーニングの視点も必要である。
 - ・ ハードの検討は、居心地や日陰や風通しなどの環境評価を重ねて進めるべきである。
 - ・ まず、今あるものをとるという作業から始めて、次に設備系の評価、その後形・ハードの検討へと進むプロセスとすべきである。一方で、仕組みの検討を進め、ハードをチェックすることが必要となる。
-
- ・ 円形のベンチから南側の軸線とフラワーロード(南)の部分が、自転車と歩行者が混在しており、現状は非常に歩きにくい。フラワーロードに面した部分が、現在は分断しているので、一体化できるのかどうか、境目をどうするのが重要な視点である。
 - ・ 噴水広場の南側の KIITO、税関のエリアには人が憩える場所が少ないので、このエリアにおける憩いの空間に対する選択肢を増やすべきである。それも含めての東遊園地を検討すべきである。
-
- ・ 車でフラワーロードを通行すると、東遊園地は周りからの視認性が低いことがわかる。内側の居心地の良さはあるだろうが、都市のクロススクエアとして機能させるためには、周りからどう見えるかは重要である。また、現在は居留地から公園を斜めに横断する利用者が多いが、非常に歩きにくいルートである。用事がなくても公園を通るといような戦略を、人の流れと合わせて検討することも必要である。
 - ・ 多目的広場、パフォーマンス広場を核としながら、通り抜けを取り込む戦略に加え、外からの視認性が非常に重要である。
 - ・ 噴水広場は、大きな面積を占める空間であるのに、「もったいない」状況である。
-
- ・ メインエントランスから慰霊と復興のモニュメントの間は、夏季は木陰で休憩している人をよく見かけるが、多目的広場への見通しが改善されると一体感が出て良いと考える。また、公園から道路が見えないというのは、公園内部の環境としては、逆に良いのではないかと考える。
 - ・ 噴水広場は、大きな面積を占めているが、使用目的がはっきりせず、もったいない印象である。
 - ・ 多目的広場は、現状の面積では、将来的に手狭になると予測している。現状では、30人程度のグループが2箇所では活動すると、他の利用者が使えなくなる大きさである。

- ・ 動線については、南側に目的をもって歩く人は少なく、特に旧居留地ガーデンの出入口を使う人は少ないと認識している。
- ・ 噴水広場については、ウォーターフロントの開発のイメージがどのように進むかを把握しないと進められない側面もあると考える。

■まとめ

- ・ 将来象をどのくらいのスケール感で考えるのか、2段階で考えるべきである。
- ・ 公園の北側と南側の間の道路(葺合南 58 号線)は必要なく、公園の北側と南側は一体であるべきという考え方もある。南側の有効活用するために、北側と一体的に使える、あるいはウォーターフロントと通じる結節性を高めることが重要である。南側の有効活用については、管理事務所やレストランのあり方も、段階に分けて、検討できると良い。
- ・ メインエントランスから南の並木のゾーンは、フードトラック等による食事や買い物等に適しており、神戸の良さ、軸性を活かせる可能性のある場所である。
- ・ 多目的広場、パフォーマンス広場は、ゾーニングするのではなく、一体化する方向であろう。居心地、環境評価、人のたたずまいと重ね合わせて評価をするべきである。また、多目的広場の使い方と合わせて規模を検討すべきである。
- ・ メインエントランスか噴水・滝のゾーンか旧居留地ガーデンかに、公園のキースケープが必要である。この公園のキャッチとなるようなランドスケープが必要である。例えばメインエントランスは非常に重要だが、道との結節点でもあるコーナーにキースケープのポイントをつくり、「公園に入りたい」と思わせる工夫が必要である。
- ・ 福岡の水上公園では屋上を有効活用して展望広場としているが、建築を取り入れることで、立体的なキースケープをつくり、高低差を解消することもできる。また、観光インフォメーション、こべりん、倉庫等の機能への要求に対応することもできる。
- ・ 目的広場を中心に、現在風物詩ともなっている大規模なイベントと、日常的なプログラムをどう両立させるか、特に芝生の維持との両立が重要であり、次回以降、検証結果もふまえて検討が必要と考える。同時に、今後の進め方、プロセスデザインについても次回以降引き続き検討したい。